と相談の由 先達而書れ有之上ハ武士たる者ハ偽あるまじき
山差物ハ仕ては一切 生ゝ女らしく有なん又和歌ハ
らば候合山形へ行うべしてハ城ハ有るも可通道なら
ぞ度の始官帝ハ前駒ハ拾られるべき筆風を飛越
て吹ゝ必余ハ天ゝ有ゝ達さく合きものならば跳砕
さし帰るべし況ハ物語して可変故通ゝまらず殊
ハ数年新ふものハ器上の高名なる天の導くを百ゝれ
部て祖を始ゝし新ゝ智謀の和を尽くゝていらくゝ
ちなで打立ゝ上ゝ十郎の達の壹場なれ こくゝ法師

武者ハ其ゝ場向 勢十郎ハ帰を乞ひ元角さして行きける
ゝゝ十郎ハ不移時日 山形へ参りの義光帝を始
外ゝて家の部等不残 而後ハ並居ゝ書院ハ兩所の
宮の別当聊新院 護摩の壇を始ゝ祈念を凝の使
ハ一門のさく元 ゝ法ハ生外ハ醫師数多出の御
清家色大事を入ゝ十郎も日頃ハ用心深ゝけるゝ
表ハ心新く思ひけん 清新なりて居ゝけるゝ疲ゝ是
ゝ法ゝけるゝば義光の出 枕色ゝ表ゝ様の世形表ハ
なぜゝ遠矢ゝ賞帝表ハ 中上ハ高 絶無ハ心置信置